
遊戯王5D's ~ 今はこの道を駆けよ

カーマイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's 今はこの道を駆けよ

【Nコード】

N0968M

【作者名】

カーマイン

【あらすじ】

朝が目覚めてみると、そこは見知らぬ部屋だった？遊戯王5D'sの世界にいることに気付いた主人公。彼はこれから一体どう過ごすのか？

注意

- ・この小説は遊戯王5D'sのオリ主モノです。
- ・作者の執筆力が亀以下なので不定期更新となります。

- ・ライディングデュエルを行う都合上、アニメオリカを採用致します。ご了承下さい。
- ・オリ主はシティ在住者です。そのため最初の話はオリジナルストーリーとなります。

第1話・久し振りにゆっくりできるかと思ったけど、そんなことは無かった。

最初はデュエルがごぞいません。しつ容赦下さい。

第1話：久し振りにゆっくりできるかと思ったけど、そんなことは無かった。

耳元に朝を告げる目覚まし時計の電子音が鳴り渡る。何度か寝返りを打った後に、無意識のまま俺は発信先へと手を伸ばす。そして眠りを邪魔した元凶に付いてるボタンを恨みを発散させるがごとく乱暴に押し込んだ。

やけによく響いていたうるさは無くなり、寝室の中は途端に静かになった。ただ、布団が擦れるきぬ擦れの音と、エアコンか暖房かは良く分からないが、空調の駆動音だけがその場を支配していた。

だが、目覚めてしばらく経つと、今の状況に軽い違和感を覚えた。何か引つかかっているが分からない。眠気のせいなのだろうか、どうもすつきりしない。そのまま仰向けになりながら、俺はしばらくそのままでいた。

まだ頭がぼおつとする。確か今日は休日なはずだ。よし、二度寝しよう、とまた布団を被る。だが、なかなか寝付けなかった。仕方がないのでだるい体に鞭打ち、泣く泣くベッドから這い出ようとした。

よっこらしよ、と非常に年寄り臭いフレーズを吐きつつ何とか立ち上がる。その瞬間に今まで抱いていた違和感の正体を俺は突き止めた。不思議なことだるさは無くなり、頭は冴えていく。

「え、どこだよ。ここ……」

思わずつぶやき、自分の右側にある窓を見る。そこからは今まで生活している場所からは考えられないほどの高さ、摩天楼の群生地が飛び込んできた。それよりも一番の驚きは、今まで六畳一間のアパートに住んでいたはずなのに今いる部屋はその三倍ほどの広さがあつた事だ。

本当にここはどこなんでしょう？今までこんな所に来た覚えはありませんよ？

「まさか、誘拐された？」

いやいや、流石にアブダクションされたというのではないだろう。何よりも理由がない。中産階級の家庭で育った俺を、ドラマのように拉致つて身代金をせしめようと誰かが画策しても、ウン万もの金を我が親愛なる両親が用意できるはずがない。

それにもし攫われたのなら、ざっと見る限り解放的で窓もあるし、箆笥や冷蔵庫などの生活必需品が取り揃えられたこの部屋にいるはずもない。

他にも部屋があるようなので歩き回ってみる。容赦なくドアを開けつつけた所、どの部屋も同じような広さのが三部屋ほどあつたが見事に誰もいなかった。

んぐぐ……見事に無駄足だった。それにしても、人っ子一人居な
いってのはどういふことなんだろう？誘拐はされていないって事な
んだろうか。

などと色々と考えていると、朝から動いたせいとお腹が減り、胃
袋の辺りが所在なげに動き始めたように感じた。……よし、何か食
べようと思いますか。誰の部屋かとはもはや関係ない。誰しも空腹は
望まぬ物なのだ。

我を満たせとうなりを上げる俺のお腹を気遣いつつ、冷蔵庫の中
身を探る。卵やハム、それに野菜もあったので、それらを持ち台所
に突貫した。

戸棚からフライパンを取り出し、強火にかけ油をひく。しばらく
経ちフライパンが十分に温まった。適当に切ったキャベツやその他
もろもろの野菜をざっと入れて一気に炒める！そして塩胡椒を小々
賞味しつつかけてまずは野菜炒めが完成した。

次に卵を二個投入する。じゅうつつという良い音をたてながら徐々
に白身が固まってく。水を汲み、フライパンの縁の周りにかけて
から蓋をする。三分間待つてやると、目玉焼きツインス（今命名）
が出来上がった。

完成した力の源とパンを持ってテーブルに着く。食器を持ち出し
て俺は食事を始めた。戸棚を漁っている時に発掘した箸を使い、野
菜炒めや目玉焼きを突きつつジャムを塗ったパンを頬張る。野菜炒

めはしつかりと油が絡まっていて、かつ味が濃すぎないからサクサクと食べられる。まだ温かく湯気を上げている目玉焼きの方も、半熟の黄身とソースが織り成すあの独特の旨味が口の中いっぱい広がる。うむ、我ながらいい出来だ。ひたすらご飯を掻き込みながらおかずをつまむ至福の時はしばらく続いた。

食べ終わってから俺は食器を下げ、他にすることもないのでテレビを見ることにした。何だか開き直ってから途端に態度が凶々しくなった気がするなあ。まあ、誰もいないから関係ない。

今のチャンネルではニュースをやっている。喋っている言葉は日本語で、どこでもやっている様な事が淡々と語られる。だがこの時自分自身がこの部屋に存在してるのだけが、奇妙なことではなかった。今の状況が更に大変なことである、というのに俺は気付いていなかった。

「続いてデュエルとスポーツの時間です。キングことジャック・アトラス選手がまた優勝しました。今回についてキングは……」

いきなりアナウンサーがここのたまった。

はあ！？ジャックだって？なんで5D'sのキャラ名が出てくる

んだ。

落ち着くんだ俺。今は何故元キングの名前が飛び出したのかを考
えるんだ。

1 同性同名のジャック・アトラスという人が何かスポーツの大会で
優勝した。

2 デュエル好きの俺が他の人の名前を聞き間違えた。

3 デュエリストのジャック・アトラスという人物が実在し、かつキ
ングである。

まず考えついた1と2だ。だが、テロップに「孤高のキング、ジ
ヤック・アトラス。デュエル カップ連覇！」と、でかでかと言
われている。ついことで両方ともアウト。なので、俺は3が正しい
と結論付けた。この間、わずか5秒。あっという間であった。

ということとは、今俺が居るのは遊戯王5D・sの世界ということになる。しかも部屋や外から見た様子からして、金持ちが住んで居るような住居である。予想が合つてるとすると、舞台であるネオ童美野シティのなかでも5D・sの主人公 不動遊星のいるサテライトという場所ではない。恐らくシティと呼ばれている場所だろう。

はあ……アニメの世界に居るってことは、もう家には帰れないのかもしれない……そんな一抹の不安を抱えながら、これから俺はどう過ごせば良いのか考える。職に就いているんだらうか。今自分はどんな立場にいるのか、と分からないことだらけであった。

そうだ、部屋の中を漁れば手掛かりが出て来るかもしれない。そう思い付き、家捜し第二弾が始まった。

今度は部屋を覗くだけでなく、箆笥や机の中まで空き巣になったかの様に手当たり次第何かありそうな所を侵す。途中で罪悪感から胸が痛んだが、自分の家である可能性もあるので自重せず盛大に部屋を荒らした。後で片付けとけば良いだろう。

それでは、収穫を発表したいと思う。まずは箆笥から見つけた身分証明書だ。牧村^{まきむら}進^{すすむ}と見間違えようもない自分の名前が書かれており、此処が俺の家であること、母親がおらず父親が海馬コーポレーションで働いていること、そして俺はデュエルアカデミアを卒業し（！）現在無職なことが懇切丁寧に書かれていた。

続いては通信機である。さっき電源を入れて、画面が空中に現れたときは腰が抜けるほど驚いた。自分の物みたいなので容赦無く履

歴を見ていく。

その結果、父親が過労になりそうなまで働いており殆ど家に寄らないことが発覚した。何でも海馬コーポレーションの内でも重要な役職にあるらしく、会社に泊まり込んで働くのが普通らしい。何と言つて企業戦士だ……まだ会った事はないが帰ってきたらきつと労いの言葉をかけてやろう。

生活の必需品、財布にはまあ節約すれば一ヶ月は余裕で暮らせる位はあつた。もちろん一万円以上はあるよ？某番組の生活は俺は望んじゃいない。キャッシュカードもあることだしお金も降ろせそう。職を探すくらいまで食いつないでいける。

財布の中に一緒に入っていたのが、この世界で行うデュエルのお供 D ホイルのライセンスだ。正直言つてバイクは原付き位しか乗りこなせていない。でもD ホイルを持っていたならば、必ずと言つていいほどのマシンに乗って行うライディングデュエルを繰り広げなければならぬ。早い内に乗りこなさなくては……

そしてこの世界で何より大事なのが、デュエルを行うためのデッキだ。何故か自分のデッキと煎餅の缶に入れておき溜め込め続けたカードの束があつた。紛れも無い俺の財産である。

だが、奇妙なことにエクストラデッキを見ると、そこには「スターダスト・ドラゴン」と「ブラック・ローズ・ドラゴン」だけが無かつた。アニメ発のこのカードは無駄に汎用性が高い。だから無くなつたと分かつた時はショックだったが、考えてみれば無くなつたのはある意味当然。これらはこの世界に一枚ずつしか存在しないシグナーの竜だ。物語の中心となつているこのカード達を俺が持っているのはおかしい。

ふう。デッキがあるということは戦わなきゃならんのか。まあ原作のキャラに会えるかどうかはまだ分からないし、気楽にいこう。とりあえず、職が欲しい……無職のまんまは流石にマズイな。デュエルアカデミア卒業してるんだから、何処か当ては有るだろう。明日でも当たってみるか。

家捜しを続け、これからどうするのかを考えていたら、もう日が傾き始めていた。早いおゆはんを食べる。

バイトでもいいので職を見付けるのが当面の目標になりそうだ。色々と密度の濃い日を過ごしたせいか、眠気が襲ってくる。明日から今まで違った日々がやって来るのかと知らずの内に胸が高鳴る。ソイツを押し殺して俺、牧村進は眠りについた。異世界での眠りはいつもよりも深かった。

第1話：久し振りにゆっくりできるかと思っただけ、そんなことは無かった。

うむ、見事にデュエルをしております。状況説明だけで終わっ
た感があります。次回は必ずデュエルを入れる予定なので、どうか
お許し下さい……

誤字脱字や感想等ありましたら、報告よろしく願います。

第2話・さあ、竹になろう！(前書き)

デュエル分込みです。主人公が使うデッキが明らかになります。

そんなことより私に暇と文才を下さいorz

第2話…さあ、竹になろう！

第2話

「さあ、竹になろう！」

この世界にやって来てから、約二週間が経過していようとしていた。まあ、そう言っても変わった点は、住居が変わった位だ。今いる所がが高級マンションの一室だと知った時は流石に驚いた。まあウダウダとしているのも何なので、色々な事をしている。

最初の数日は主にD ホイールを弄っていた。ガレージに格納してあった俺の相棒はダークブルーのカラーで翼を失った戦闘機のようなフォルムをしているD ホイールだった。その名も「ダウンバースト」。

……戦闘機のこととはさっぱり分からないが、正直の所かなり格好悪いと思う。でも無いよりは絶対にあつた方が便利なのだ。一輪しか無い某キング御用達の物や、形状がどう見ても修正テープであったりと、他の奴らのD ホイールも酷いんだと妥協して乗ることにした。

小二時間ほど走ってみた所、見た目とは裏腹に馬力があり非常に安定感のあるマシンだった。

原チャリしか乗ったことのない俺でも運転しやすいし、加速もま

ずまず、何より小回りが利くので通勤用に活躍しそうだ。

あとライディングデュエルの時は自動運転オートパイロットモードで良いだろうな。後々、自分で走りながらデュエルできるようにすればいいか。

公道を走っている時に見掛けたが、最高速度で駆け抜け、カーブを曲がる時も到底有り得ないスピードで抜けていたりとスピード感溢れる試合を繰り広げていた。普段俺がやっている机の上でやるデュエルとは一味違っていた。何と言うか、見ているだけで体中の血が滾る。アニメで見た時は「何これえ？」とか「おい、デュエルしろよ」とか思ったりもしたが、実際に見るとまた違った印象を抱いた。

つまるところ、俺もライディングデュエルの虜になってしまったのだ。いずれ、試合するときに向けて、走り続けていきたい。

一度やってみたいし一日でも早く乗りこなせるようにしよう。果たして俺が原作に関われるかどうかは分からないが、D ホイールを持っている以上は手足の様に扱えなければいけない。とりあえず毎日走る様にしよう。動力となっているモーメントは無限のエネルギーらしいから何度でも走れるようだし。

おととい、遂に俺の二ト生活に終止符が打たれた。カードショップ、海馬ランド等あらかじめ目星を付けておいた店舗を見て回る。その結果とあるコンビニのアルバイトとして雇って貰えそうだ。

明日、面接をするらしい。今の俺の立場はデュエルアカデミアを卒業したということ、結構箔が付いているみたいだ。それでもえり好みはせずにいきたい。働く事自体ができればそれでいい。

今は明日着るスーツを準備している。アルバイトの面接でも第一印象が大事だと前の世界の友人が言っていたのでクローゼットから引っ張り出してきた。少々崩れてはいたが、着たら分らない程度なので心配ないな。

履歴書は出したし、あと持って行くのはデッキとデュエルディスプレイを持ってこいって言ってたな。何より此処はあの海馬コーポレーションの城下街である。全てはデュエルが支配する社会になってもおかしくない。

まあ原作ではリアルファイトが何度も繰り広げられてきたが……

翌日、面接を行うコンビニに直行する。わざわざ忙しいのに面接をやってくれる店長には本当に感謝しなければならんな。店長に店の奥にある部屋に案内され、いよいよ面接が始まった。よし、絶対受かるう。

「じゃあこれから面接を始めたい。俺は『Fstars』店長の岩崎だ。履歴書は見たから幾つか質問する。気楽に答えてくれ」

始めてコンビニの名前を聞いた時に、某タバコの名前なのかセブナイ○ブンなのかどっちかにしろと不覚にも思ってしまった。いろ

いとツツコミ所が満載な世界であるが、今はとにかく面接に集中しよう……

「分かりました」

「まずは志望動機を答えてくれ」

「はい、私はデュエルアカデミアを卒業しましたが、世間の人達と密接に関わっていきたいと思いこの『Stars』を志望しました」

今のは言葉の綾だ。真の理由は早く職に就きたいからなんだ。

「続いて、もし道に人が倒れていたら君はどうする？」

む……いきなりレベルアップしたな。ええい、思った通りに答えるしかない。

「はい、まず周囲の方々に協力を要請してから役割を分担して、医療機関が来るまで救助にあたります」

こんなような質問がさらに幾つか続いた。ふう、解答を捻り出す度に疲れるな。だが、出来る限りのことはやったと思う。おとなしく結果を待つとしよう。

「よし面接はこれでおしまいだ。続いて実技を行うから表に出なさい」

え、何の事でしょうか。そんなこと一度も聞いてませんよ？もしや、いきなり店番をやらされるんだらうか。

「デッキは持っているな？準備をしてさっさと始めるぞ」

ですよー。やっぱりデュエルがきたか。だからデッキ持ってきてとか言われたんだな。てか店長ノリノリでデュエルディスク構えてるし。と、どうでもいいことを考えながら、家から持ってきたディスクを俺は構える。

デッキをセットするとカードが自動的にシャッフルされた。おお、時代の素晴らしさを感じる。シャッフルするときにも手がもつれてカードを落としたりすることもない。

「君の強さを確かめたい。さあ本気でかかってきな！」

「(すごく……熱いです)望む所です。絶対に合格しますよ」

「一戦交えれば、全てが分かる！」

「「デュエル!!」」

夢のエネルギーであるモーメントを起動させディスクが展開される。俺と店長はお互いにカードを5枚ドロ―した。手札を見る。まあまあかな、一応事故ってはいないし何とか対抗できそうだ。

進

LP：4000

店長

LP：4000

「先攻は俺からだ。ドロー！」

さて、どんなデッキだろう？かなりドキドキする。絶対に有り得ないが、ライフが4000のこの環境で満足やBFを持ち出してきたら泣くぞ？

「俺は手札から『グリーン・ガジェット』を召喚する。効果でデッキから『レッド・ガジェット』を手札に加える」

グリーン・ガジェット

LV：4

ATK：1400

ガジェットか。コントロール力に優れ、一時期猛威を振るったカードだ。ならデッキは【除去ガジェット】か【マシンガジェ】辺りが妥当かな。ガジェットはアドバンテージの塊なのでなるべく早く決着を付けたい。

店長が叫ぶと、緑色のフレームで覆われた歯車型のモンスターが姿を現す。リアルなのに文句は無いんだが、リアルを追求し過ぎて歯車に光沢を付けないで欲しいな……反射した光が目に入って非常によろしくないんだが。

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

【除去ガジエ】ならばミラフオや奈落、炸裂装甲等の除去カードを伏せたんだろう。生憎だが発動させたくない。

俺はカードに手を掛ける。そして、今まで一番言いたかった言葉を叫んだ。

「俺のターン。ドロー！」

思うに、この言葉を言うから原作キャラ達がディステニードローを成し得るんじゃないか。初手から「サイバー・ドラゴン」三体ある人や、口上通りに攻撃力1000以上のモンスターを引き当てる人もいるし。まあ、前やってたアニメの話なんだけれども。

おっと、今はこの戦いに集中しなくては。

「手札からサイクロン発動。右側のカードを破壊します。」いきなり俺は万能カードを使う。そりゃあ、あからさまに畏張ってある状況なんでね……

「君が選んだのは『血の代償』だ。当然の事ながらチェイン出来ないの、そのまま墓地に置くぞ」

ピンゴ。危ない危ない。葬っておいて良かったな。放っておいた

ら大量展開されるとこだった。次の行動に移ろう。

「俺は『ナチュル・クリフ』を召喚します」

ナチュル・クリフ

LV：4

ATK：1500

そう、俺のデッキはデュエルターミナル産のカード群「ナチュル」だ。攻撃力・守備力共に貧弱なのが多いが、トリッキーな効果を持つ奴らが勢揃いしている。ワンターンキルは難しいが、嫌らしく戦い続けられるのが特長である。

さあ、「奈落の落とし穴」よゆめゆめ発動するなよ？切り札召喚した時に、空気を読まずに大抵来るからな……

店長の様子を見ると罫を発動していない。まずは一安心かな？

「ナチュルか、余り聞かないカードを持っているな」

「ええ、非常に頼りになりますよコイツらは。構築さえ変えれば何にでも対抗できますし」

「良い心掛けじゃないか。……話が逸れたな。さあ続けてくれ」

「分かりました、バトルフェイズに入ります。クリフでグリーンガジェに攻撃」

「くっ、トラップ発動。『炸裂装甲』で『ナチュル・クリフ』を破壊」

いきなり、見た目が塗り壁妖怪のクリフが内側から発破をかけられたように爆発した。だがこれ位では何とも無い。むしろチャンスである。

「クリフの効果を発動します。このカードがフィールドから墓地に送られた時、デッキからレベル4以下の『ナチュル』と名前の付いたモンスターを一体攻撃表示で特殊召喚します。俺は『ナチュル・フライトフライ』を召喚！」

ナチュル・フライトフライ

LV:3

ATK:800

本当にクリフは優秀である。今の俺のデッキなら、大体のモンスターをリクルート出来るし。

「フライトフライが特殊召喚された時に、続けて手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時に、デッキまたは墓地から同名モンスターを可能な限りお互いに特殊召喚します。俺はフライトフライを更に2体特殊召喚！」

これが、このデッキの動きの一つだ。でも、ライディングの時に暴走召喚が使えないのがネックだな……いずれ代替案を考えておこう。

「俺は『グリーン・ガジェット』を一体特殊召喚し、効果で『レッド・ガジェット』を一体サーチ」

「ちょっと厳しいですねー。ですがフライトフライの効果発動！自分フィールド上のナチュル一体につき、相手モンスターの攻守を300ポイント下げます。フライトフライが三体いるので、グリーンガジェのステータスは900×3で、2700ポイントダウンします」

グリーン・ガジェット×2

ATK：1400 0

DEF：600 0

フライトフライと暴走召喚って、『電池メン 単三型』と同じと同じくらいシナジーするよね。あつちは攻撃力3000のモンスターが3体出て来て、更に『漏電』という全体除去があるから容易にワンキル出来る。

こっちはナチュルが5体居れば最大4500までのモンスターのステータスを0に出来て、今は使わないけどフライトフライのもう一つの効果で相手モンスターのコントロールを奪えるから……パネエ。

「フライトフライ3体で擬似ダイレクトアタック」

店長

LP：4000 1600

「ちっ、攻撃力を0にしてガジェットを破壊するとは。だが、まだ私は負けない」

何たってガジェット使いだからな、と心の中で店長の話をどうでもよく続ける。嫌らしさにおいては店長も引けを取らない。相手に

罨を張られると途端に不利になるので、次なる除去カードを引かなくては……

「カードを一枚伏せ、ターンエンドです」

さあ、次はどう来る？

「俺のターンだ。ドロ」

やはり、コイツは強い。一瞬で俺が【ガジェット】を使ってアドバンテージをコントロールしていると認識しやがった。洞察力の高さと、低い攻撃力を補うプレイングはこちらよりも勝っているのではないか？デュエルアカデミアでは中の上だったそうだが、更に上位の生徒はどれだけ強い？

だが、これで彼の強さが分かった。私の望みも彼を採用すればきつと上手くいくことだろう。よし！今はこのデュエルを全力で戦おうじゃないか！

「俺は『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚し、『機械複製術』を発動。デッキから『サイバー・ヴァリー』を更に2体特殊召喚する」

サイバー・ヴァリー×3

LV:1

ATK:0

今、俺の4枚の手札には罫はない。故に自力で引き当てる！

「速攻魔法『手札断札』！お互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドロする」

よし、2枚とも罫を引いた！コイツを伏せてヴァリーと一緒に次のターンをしのぐぞ。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

さあ、牧村進君。かかってきなさい！

店長の場にはヴァリーが3枚と、伏せカードが2枚。でも、プレイングミスなのかな？断札使うよりも、ヴァリーを2体除外して自分だけドロした方が得策なんじゃ無いかと自分は思う。だが、今は関係ない。自分のプレイングをするだけだ。

「ドロ。スタンバイフェイズを流して、メインフェイズに移行します。魔法『ライトニング・ボルテックス』発動。手札の『ナチュル・マンティス』を捨て、モンスターを全て破壊させて貰います」

「通そう……少し厳しいな」

とは言っても、表情をあんまし崩さない店長。流石である。

「次にフライトフライを一体リリースして『ナチュル・バンブーシュート』を生け贄……じゃなくてアドバンス召喚。チェーンしますか？」

「いや、しない」

少しとちった。アドバンス召喚の呼び方を俺はたまに間違えてしまう。長年生け贄召喚だったモノがいきなり名称が変わって、当時はかなり違和感を抱いた。今でも違和感こそ消え果てたものの、自然と口から出てしまう場合があるんだ。

ナチュル・バンブーシュート

LV：5

ATK：2000

見た目二人組のた○のこの里のキャラが現れた。見た目は実にフアンシーだが、これでも俺の主戦力だ。何たってその能力が目茶苦茶頼りになるのだ。

「ではバトル！バンブーでダイレクトアタック」

そっぴゃ、遊戯王キャラって何かしらモンスターに技名付けていたような？このまま何も言わないのも微妙だし、そっぴゃ、悪ノリしてみよう。

「バンブー・ストライク！」

何と言う事でしょうー（爆）我ながら実に微妙な技名なこと……
ネーミングセンスの無さに全俺が泣いた！

自分で言うのも何だけどさ……いくらなんでも名前が安直過ぎる。そりゃあ厨二っぽいヤツよりはマシだけど、これは無いわ。

などと、くだらない葛藤のせいで俺が内心悶えている内に、店長が動いた。

「畏発動。ミラーフォ……」無駄です。バンブーがナチュルをリリースしアドバンス召喚した場合、魔法・畏を発動出来ません。今度はえ〜と『バンブー・スピアー』！「何い！？」

ソリッドビジョンのカードが起き上がる直前に、タケノコがカードを突き刺すようにして生え始め、急速に成長を始めた。

その速度は雨の後よりも更に速く上へ上へと登り、枝に葉を茂らせる。タケノコはほんの5秒足らずで、立派な竹へとその姿を変えた。当然、伏せカードは発動出来ない。

これは人生最大の驚愕映像だな。魔法・畏カードを無効化させる能力をこのように再現するとは恐るべき技術だ。海馬社長は、何十年も前にこんなモノを実用化しているとは……

そのまま、バンブーは店長目掛けて突っ込んでく。二匹であちこち動き回り、店長を攪乱し何処から攻撃するのか分からなくする。しばらくぐるぐると回り、堰を切ったように続けざまに体当たりして、俺の勝ちが決まった。

「（ここで強力な効果モンスターを召喚してくるか）くっ、ぐわあ〜！」

店長

「素晴らしいデュエルだった。文句なしの採用だ」

デュエルが終わった後、こう店長がのたまった。

ついに……ついに採用されたか！そう思うと、久しぶりに安堵感と仕事に対するやる気が体の中心から満ち溢れてきた。

「ありがとうございます。こんな俺を雇ってくれて……」

「何、謙遜する事はない。君のやる気とデュエルに対する姿勢に感服させられたからだ。当然の結果だよ」

「そう……ですか」

前者は自分で言うのも何だが、かなり本気であったと思う。店長強いし、ガジエ 特に特殊召喚を封じる奴や、徹底的にカードを除去的るタイプは油断するとまくられるからな。前にも、ガジエから『王宮の弾圧』に繋がれ、負けた経験がある。

しかし、後者は決して違う。そう見えるだけに過ぎないんだと思うぞ。

だってどう考えても俺は相手を嵌めようとデュエルを進めているもの。もし大会に出るなら、圧倒的な物量で押し切り相手に何もさ

せないようなデッキか、今使ってるナチュルみたいに変幻自在に相手を翻弄させるようなデッキを使うだろう。

そう俺が思ったのを察したのか、店長が続ける。

「いいや、そういう事こそデュエルの真髄だ。正々堂々と戦うのもそうだが、鎌掛けたり、罠掛けたり、願掛けたりするのもまたしかりってやつだろう」

店長、最後の微妙に間違っているとします。「必要なカードが来て欲しい」という意味なら良いけれども、願掛けするのは神社にいるときだけにしましよ。よ。」

「話を戻そう。君には平日の午後と休日のシフトに入ってもらおうから。休みは平日二日間だ。不定期だから注意してくれ。主な仕事はレジ打ち・商品の管理と、この店に内在しているカード売り場を取り仕切ってもらいたい」

うん？最後のだけ独立しているのは何でだ？ソイツは商品の管理の範疇に入るだろう。やつぱりここは遊戯王の世界だからトレーディングカードが特別視されているのかな。確かに見た目コンビニとしては異様なほど充実しているとは思っただけども。

「最近、カード売り場を拡張してカードショップを併設しようと思ってるんだ。だが、カードに詳しい人材が不足していてね、正直進君が此処を志望したときは狂喜乱舞したよ」

コンビニ兼カードショップか。ミニストップみたいに中で物を食べられるコンビニや、中に郵便局がある所なら聞いたことがあるが、カードショップと一体になるのは知らないな。この世界が5D・s

だからこそなのか？

目上の人に褒められるのは、少しくすぐったいが嬉しい気分になる。期待に応えられるよう努力したい。

「分かりました。自分には至らない所があるかも分かりませんが、それでも精一杯頑張っていきたいです。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく」

こうして、異世界での最初の仕事が始まったのだ。ニート回避と給料の為に誠心誠意頑張りたい所だ。

第2話・さあ、竹になろう！(後書き)

ということで、進君が使うデッキは【ナチュラル】です。最近はずっとのパックにも登場し、作者の中では好印象なモンスター群であります。新弾でも出るらしいので嬉しい限りです。

更新に関しては作者受験中のために、間が開いてしまうことが多いです。そのため不定期更新という形にさせていただきました。月一回は更新できるように善処しますのでご了承下さい。

第3話・私は風になりたい（前書き）

最近すごく忙しいですorz

誰か、暇をください……

第3話：私は風になりたい

「今日からここでお世話になります、牧村進です。精一杯つとめさせて頂きますんでよろしくお願いします」

バイト初日、制服を着て前掛けを装備した俺は、お店の奥でこれから一緒に働く人達に挨拶をすることとなった。面接が終わった後に、文字通り後塵を上げながら家に直行しすぐこの挨拶を考えただけだ、これくらい言えれば十分かな？何事も第一印象が大事なのだ。ここで粗相の無いようにしないとイケないな。

その後も自分のことについて淡々と語っていく。

特に噛むこともつかえることもなく自己紹介を終える。成功したかとはともかく、これで晴れて『7 Stars』通称セブンの一員だ。早くこの場所に慣れたい。

このあとに続いて自分の意気込みを語り、何とか終わった。そして他の人達が話をするのを聞く。ただ言っていることを聞いているだけも何なので、ここらで彼ら3人を紹介しておこうと思う。

以前からお世話になった、筋肉質でいかつい体型をしているが、根はすごく優しいナイスミドル、店長の岩崎峰^{いわさきたかし}さん。地域密着型の店作りを目指しているそうで、カードショップの併設はその一環であるらしい。

コンビニは大抵フランチャイズの店なのに、こんなに自由にして良いのだろうかと疑問を持った。けど、どうやら自由な店作りこそ上層部が求めるモノらしい。言っていることは素晴らしいが、出来

たとしても人は来るかどうかは今分かん。地道に宣伝していく他はない。

続いて俺よりも背が高く、甘いマスクが特徴的なダグラス・ディルガベジータさん。……正直本当にコンビニの店員かと思っってしまったのは秘密だ。モデルや俳優をやってもおかしくない人だ。何より美貌のスケールが違いすぎる。話を聞いていると、結構親しみやすそうな人である。仲良くなれるといいな。

最後にただ一人の女性であるレイナ・コートニーさん。話からすると割と古参の人らしく、他の店員の人からも慕われているそうだ。俺もこの世界に迷い込む前はコンビニで働いたことがあるので、レジ打ちや商品の管理については腕に覚えがあるが、分からないことがあつたら遠慮なく聞こう。

皆紹介が終わった所で早速仕事に移る。店長の采配でダグラスさんはレジ打ち、俺とレイナさんは奥へ行き商品の補充をしに行くことになった。

いつもはレイナさんだけでも切り盛り出来ていたらしいが、何でも今日に限って入荷した商品が多いそうなのだ。とすると、必然的に男手が必要になるため、新任早々の俺が任された。

俺達は端末を見て少し埃っぽく、甘ったるい匂いやコーヒーの独特の香りなどが入り混じる倉庫にいる。その奥から不足している物を取り出し店のショーケースに並べていく。

特におにぎりやパンなどの主食の類は重点的に補充しておいた。何でも売上が好調で、すぐ無くなってしまふんだとか。食べ物その他にも菓子やアルコールなどのドリンク類、雑誌なども店頭のパラにぶっ込んでおく。

ここまででは、全てが順調にいつていた。しかし、その時俺は知る由もなかった。そして、二人掛かりならばすぐ終わるだろうと高を括っていた。自分がとんでもない強敵と立ち向かわなければならぬ事など知らずに……！

「いや、進君がいるとすごく効率が良いわ。素人とは思えない程の手際の良さね」

しばらく作業を続けていると、レイナさんが何かを不思議がるような顔で話し掛けてきた。

「こういうのを一度やってたことがあるんで。それでも現役の人達には敵いませんよ」

俺は無難な答えを返す。ただし、前居た世界の話だけだね。レジ打ちの時に値段の桁を間違え慌てて値段を打ち直したり、倉庫から持って来る品物を間違えたのは良い思い出だ。

あと前の話から気になった方もいるかもしれないけど、俺は年齢が上の人に対しては大抵敬語で通す。地の文と会話の口調が違っていても今後は気にしないで欲しい。不肖、牧村進の一生のお願いだ。

レイナさんは納得したような表情をしつつ話を進める。

「デュエルアカデミアに行っていたにしては、随分と色々とやっているのね。情報が無いから、あそこの生徒って何と言うかデュエル一筋という感じがするの」

「他の人達のことは分かりませんが、意外と他のこともやっているとしますよ（んな事まで知らん）。そーいや、レイナさん達ってデュエルするんすか？みんなと一度やってみたいんですけど」

「私はさっぱり。でも、他の人達なら何人かはデッキを持っているわよ。一番強いのが店長、他に強いのがあそこにいるダッグね」

「はあ……」

「ダグラス」だから「ダッグ」なのか……何だかあんまりなあだ名だな。もっとマシな呼び名があるだろうに……結構なイケメンのはずなのに彼の扱いが不憫でならない。

「店長とは一度戦ったことがあるから、次はダグラスさんかなあ……って、うわっ!？」

そう言いつつ俺は一つの段ボール箱に手を掛け ようとしたがすぐに手を離れた。ただの商品とは形容しがたい、大量に積み上げられた段ボール箱に眠る何かを俺は目にしてしまったのだ。

そこに描かれたのは、古来から生き続ける伝説。人々の憧れの結晶。それは、覇者。その瞳に魅入られた一人の偉大な人間しか持ち得ない魂、それが荒涼とした茶色の紙の上に顕然していた。

まあ要するに、この世界に3枚しか存在しない社長の嫁『青眼の白龍』が、段ボールの一面にデカデカと印刷されていたのだ。いきなりこんなものを見せられちゃあ驚くしかない。というか、中に何が入っているんだろうか？

「すみませーん、レイナさん。この箱も開けといた方が良いですか？」

「なに？？つて、ああそれね。すっかり忘れてたわ。同じようなのが、あと2種類あったハズだから、みんな開けて店頭に並べておいてちょうだい」

「りょーかいしました」

さて、開けるとするか。箱の側面にある開け口を、むんずと掴んで端から一気に剥がす。ビリリツと気前良い音を発し、途中で破けてしまうこともなく、最後まで剥がし終えられた。もう一回おなじことをやってから、中に入っているものを取り出す。

「何ぞこれ？ただのコーヒーじゃないか」

思わず声に出してしまう。フィギュアでも出てくるかと思っただが、現れたるは缶コーヒー。何で箱に社長の嫁が出てきたか気になるので、プルタブから缶独特のへこんだ底面までくまなく確認する。その結果、驚くべきモノを発見をした。

側面にプリントされた文句を読んでみよう。俺は、これを見た瞬間にあごをあんぐりと開けたままにしてしまった。

「世間を賑わせた、あの『ブルーアイズ・マウンテン』が、ついに缶コーヒーとなって登場！！『フハハハハハ！貴様らはその味に酔いしれているがいい！』店頭希望小売価格：3000円」

何この海馬社長。5D・Sにまで絡んでくるとは思わなかったぞ。それにいくら何でも、3000円は高すぎだ。普通のコーヒーはまだしも（それでも高いけどさ……）、缶コーヒーでこの値段はぼったくりにもほどがある。もしや、社長が勝手に値段を吊り上げるのでは？今の社長が誰だかは知らないが、自重して下さい。

更なる笑いを求めるかのようにけなしの腹筋が震え立つので、欲求を満たしてやる。他の二種類の箱も同じ缶コーヒーだった。

「『だが、甘いぞ遊戯！』『ブルーアイズ・マウンテン』に使われる厳選された豆を使用。パンチの効いた苦味とミルクのマイルドさが同居する『カフェオーレ・KAI』」

「独自のエスプレッソ製法で豆の成分を凝縮しながらドリップしました。スツキリとした苦さと清涼感はまさに爆裂疾風弾>バースト・ストリーム<！『ブルーアイズ・U>アルティメット<・マウンテン』（コンビニ限定）『粉碎！玉砕！大喝采！フハハハハ！』」

ええい、この世界の缶コーヒーは化け物か。何と言うネーミング

なのだろう。色々突っ込む所が満載なのだが、笑いや憤慨をぐつと押し殺し、自分の作業を続けることにした。一（他にも力オスな商品が多々あった。デフォルメされたモンスター型のビスケット『食べっ子もんすたあ』や、次元の裂け目から飛び出す我が魂『D・D・レモン』、『ボルシヤック・NEX』など飲み物もすごい名前だ。コピーライターは何を考えているのだろうか。何か別のモノも混ざっていた気がする）

こんな風になりながらも何とか作業を進め、終わった時にはシフト交代の時間も近づいていた。奥へと引っ込み制服の装いを解除して普段着へと戻り、未だレジを打っていたダグラスさんと店長に軽く帰る旨を伝えた後、コンビニから出ていく。

裏に止めてある愛機ダウンバーストを起動させる。コクピットに光がともり、起動準備が始まる。

“ There are no wrong . You can s
tart anytime . ”

しばらくするとモニターにこう文句が表示され、準備が終わった。

ヘルメットを被りマシンを発進させる。公道に至り、急発進させたD ホイールはスピードを落とさず車の間を縫いながら、長い自宅までの道をひた走る。駆けている間、風と一体になったようないつまでも身を委ねていたい感覚に、俺はただただ魅了されていた。

ひとたび加速すれば、D ホイールと、自分と、自身を取り巻いている空気が一体となって、路上に一筋の風を起こす。マシンで通り過ぎる際に、自分だけの烈風を、産み出しているような錯覚に陥る。

ほぼ最高速度で進み、一層鋭さを増したダウンバーストの走りは、目の前にある空気の厚い壁を、一瞬で切り裂き突き進む。名前通りに突風になって、地上を駆け抜けている気分だ。

バイク乗り達は、皆こんな体験をしていたのか！さっき始めて全速力で走りこう感じた。うん、これなら中毒になるのも頷けるな。車に乗っている時とはまた違った興奮と恍惚感に浸りながら、更にマシンを加速させる。地上用の戦闘機は、今にも飛び上がりそうな様子で滑走路みたいな道路を進み続けた。

自宅に着き、名残惜しいがダウンバーストから降りて現実へと帰る。今の俺にとってはこの世界が現実。元の世界に未練が無い訳ではなかったが、帰れる手段が無い以上どうすることもできない。

たとえ帰れるとしても、ずっと先のことになりそうだ。ジャックがキングであり、デュエル・オブ・フォーチュンカップ、あとダグナー達との戦いというのはまだ起こってない。それらは多分ことごとく未来のことであるのだ。

少なくともここらで何らかの手掛かりがあるのでは、と俺は踏ん

でいる。確固たる証拠というのはもちろんない。でも、今俺はある意味何でもありな世界にいる。だから、何かしら見つかると思ってしまふのだ。

「まあ、余計なことは考えずにいつも通りにいこーか。うだうだ考えてても、何にも解決しないし」

そう、一人呟き思考を他のことについてクローズアップさせたのだった。

家の中に入り、ゆつたりとした部屋着へと装いを変える。まだ寝るまでにはまだ時間がある。とりあえず何か暇を潰そうか、ということと夕飯を作り食べている合間にテレビを見ることにした。

チャンネルを回すと、ジャックがいた。デュエル大会の番組なのだろうか。今、放送されようとしている。キングはエンターテイメントでなければならぬ、と本人が言っていたので俺の暇つぶしに見ることにする。

対戦相手はこれまで勝ち越してきた、ウィル・エグゼ何とかという人だ。今まさに、キングが待ち受けるデュエル場へと進んで行く。登り終わり、デュエルお約束の口上を述べる。

「行くぞ、キングの自信というヤツをひっくり返してやる！」

「フン。キングたる俺に刃向かう、そのような傲慢不遜な態度。こ

の手でへし折ってくれるわ！」

一番傲慢なのはアンタだろ、とこれを見ているみんなと同じようなことを思った。

ともかく、デュエルが始まった。先攻はウィル選手。

「私は『マンジユ・ゴッド』を召喚する。効果を使い『高等儀式術』を手札に加える」

ああ、これ下手したらキング負けるんじゃない？この流れは環境を引っ掻き回した【デミスドージャー】そのものだ。『マンジユ・ゴッド』で儀式魔法を引っ張ってきたなら、既に手札に儀式モンスターがあるはず。まず間違いなく次のターンで飛び出て来てしまうだろう。

マンジユ・ゴッド

LV：4

ATK：1400

いずれにせよ、ジャックにとっては1ターン目にして厳しい展開だ。自分のターンに何かを伏せるとかしなきゃ、確実に負ける。8000のライフでも一瞬で葬るほどのワンターンキルデッキ。それが4000のこの環境にあれば、脅威は倍増することとなる。一番良いのはこっちがワンキルすることなのだが、ジャックのデッキはパワーデッキであるがそういうモノではなかったはず。

さて……どうするんだ？

「俺のターン。フ、そのデッキで数々の相手を打ち倒してきた。違

うか？」

いきなり自信満々の様子で話す現キング。でも内心はどうなんだろう。今回のデュエルがおそらく最大級の危機だ。みすみす気が抜けるものではない。

「そうだが、何か？」

「最初に言っておこう。キングの座に君臨するこの俺にとっては、そのような小細工は塵や霞み程度にしか過ぎない！そのことを今、ここで証明してやろう！俺は『ビッグ・ピース・ゴーレム』を召喚！このモンスターは相手の場にモンスターがいる場合、リリース無しで召喚することができる」

ビッグ・ピース・ゴーレム

LV:5

ATK:2100

半上級モンスターを出してきたか。勝つためには次の手が気になる所だ。罾を張り守りに徹するか、そのまま殴るか。結構重要なターンニングポイントである。

「更に俺は手札から『二重召喚』を発動！このターン二回の召喚権を得る。『ダーク・リゾネーター』を召喚！」

ダーク・リゾネーター（チューナー）

LV:3

ATK:1300

そーですか。いきなり我が魂召喚ですか。モンスターを破壊しと

く作戦に出たジャックだけでも……間に合うのか？

「いきなりだが、その勇姿をとくと見るが良い！レベル5『ビッグ・ピース・ゴーレム』に、レベル3『ダーク・リゾネーター』をチューニング！王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

LV5 + LV3 = LV8

ダーク・リゾネーターが姿を変えた、まばゆいばかりの青い光球。それが岩の巨人の周りを回り、ただのモンスターとしての限界を超えていく。いつしか巨人の姿はなく、5体竜の内の一角 熱く滾る魂の竜に姿を変えているのだった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

LV：8

ATK：3000

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『マンジュ・ゴッド』に攻撃！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

「くっ、前座でしかない攻撃でこの衝撃。これがキングたる者の証なのかっ？」

むしろそれだけの発言ができるアンタがすげえよ。しかもレモンを前座呼ばわりか。アニメの中じゃ大体合ってるけどさあ……間違いないくジャックキレルぞ？

ウィル

LP：4000 2400

それでも、ライフは残る。歯牙にもかけないといった態度で屹立しているが、次のターンでジャックのライフは大幅に削られてしまおうだろう。と、いうジャック勝利フラグを立てておくことにした。

「俺はカードを伏せて、ターンエンドだ」

「私のターンだ。『高等儀式術』発動！デッキから通常モンスター『ネオバグ』を2枚墓地に送る。そして………手札から合計レベル分の儀式モンスターを特殊召喚する！」

ネオバグ×2

LV：4

ATK：1800

はい、ここでウィル選手。得意のワンターンキル突入しました。

何かここら辺でコマールシャルが入りそうだが、幸いライブ放送のためその危機は回避される。

「瘴気を纏いし肉体が、力を振るいこの場を終焉へ導く！降臨せよ！『終焉の王デミス』！」

終焉の王デミス

LV：8

ATK：2400

ワンキルの準備は揃った。まだ相手のライフは2000以上あるし、かなり厳しい状況だ。唯一場にある伏せカードも役に立つのだろうか。最後の望みはこれにある。

「デミスの効果発動！自分のライフを2000払い、このカード以外全て破壊する。『ジ・エンド・オブ・エイジ』！」

ウィル

LP：2400 400

それ何て皮肉？キングの時代を勝手に終わらせたよこの人、と思いつつデミスが根こそぎカードを破壊するのを見る。

「そんな効果ごときではキングは屈しはしない！リバーズカード、オープン！『バスター・モード』レッド・デーモンズを墓地に送りデッキから『ノバスター』と名の付いたモンスターを特殊召喚する。更なる高みへ我を導け！『レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター

LV：10

ATK：3500

ウホッ、いいドラゴン。コイツ自体は破壊されてしまっが、『巨大化』やら『団結の力』が相手の手札に無ければ、取り敢えずこのターンは凌げる。

「今更モンスターを召喚した所で何になる？どのみち葬り去られるというのに」

終焉の炎が大波となって、召喚されたばかりのモンスターを無慈悲に飲み込む。

「フン、キングは常日頃から一歩先に行くのだ！破壊された時に効果を発動！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を墓地から特殊召喚

する。再び王の勇姿を見るがいい！」

だが波が引いてもいまだ王者の証を葬り去ることはできなかった。

「くっ、カードを一枚伏せてターンエンド。」

お、キング生還。どうやら装備カードを相手は引けなかったらしい。相手にとっては運が悪かったと言わざるを得ない。

そのまま、モンスター『ツイン・ブレイカー』を召喚し、レッド・デーモンズがデミスに攻撃した時点で相手のライフがゼロになり、ジャックが勝者という結果に終わった。

終わった後のインタビューにジャックは答える。

「勝利おめでとうございます。今回、好調であったウィル選手との対戦でしたが、戦っている時にどのようなことを感じたのでしょうか？」

「デュエルは魂のぶつかり合いだ。どんな相手であろうと俺の魂たるレッド・デーモンズで真っ向から向かい撃つ。考えたのはそれだけだ」

「ありがとうございます。では会場とテレビの前の皆さんに一言お願いします」

「会場の皆、今日は応援感謝する。テレビの前のそのキミも、ぜひ試合会場に来るがいい！試合会場で俺と握手！」

プチッ。

テレビが終わると、突然、疲れが這い寄ってきた。他にすることも無い。適当に最後のご飯を頬張り、シンク口の口上考えなきゃなと思いつつ軽くお風呂に入る。そして、すぐに寝る準備をすることにした。

とりあえず、すごく眠い。そんなにたいした事はしていないはずだが、もしかして体が鈍った？ここ二週間程、全く体を動かしていないのが祟ったのかなあ……まずは俺のお腹がたるむ前に食い止めるぞ、とベッドの中で固く誓ったのであった。

第3話・私は風になりたい（後書き）

書いてて思ったんですが、この作品って本当に5D・sのSSな
のでしょうか……

とりあえず原作に絡むのはもっと先になるかもしれません。

第4話・自重をすることは、時にコミュニケーションの潤滑油となる(前書き)

迷走しました。ちょっと吊って来ます。

第4話：自重をすることは、時にコミュニケーションの潤滑油となる

コンビニ、セブンにて働き続ける日々が続く、何週間か経った。相変わらずダグラスさんやレイナさん達と駄弁りながらも働く毎日だ。お客様にもようやくと顔を覚えてもらえたようで、レジ打ちしているとな前で話しかけてくるようになった。結構うれしい。

大きなトラブルもなく、順調に働いてる今日この頃。何とか自分のモチベーションも低くさせずに高いままで保っていると思う。このまま行けば昇給も有り得るかもしれない、と店長が口にしていたので更に続けていきたい。世の中銭スラ、じゃなくて昇給という言葉は誰しも心踊る。まあ、コンビニのバイトだけでも。

「ああ、進君。少し待ってくれないか？」

そんな感じで今日も働き、仕事を終えた。奥に引っ込み、着替えていると店長が直接声を掛けてきた。

「明日は進君、午前中休みだよな？」

「はい、一応はそうなってますけど……？」

「実はね……」

店長から珍しく指示が飛んだ。そんなに大変なことでもないし、

休むついでにやればいだろうな。

「……という訳なんだが、引き受けてもらえないか？」

「分かりました。明日にでも当たってみますね」

「ああ、頼んだよ。」

「できれば期待せずに待ってて欲しいです。では、失礼します」

それだけ言って、俺はセブンを後にした。

土曜日の午前中に店長からの御達示通りに、偵察がてら他のカードショップに行くことにした。何より情報はもとより店長にも俺らにも、そのような店の作り方のノウハウなんて無い訳だ。

このままでは開店出来ても繁盛し続けられるのか微妙な所。そこで店長は俺に他のお店に向かせ、使えそうな箇所があったら惜し気もなくパク……もとい参考にすることにしたのだ。

店長から期待を掛けられている分、せっかくのカードショップの売り上げが伸び悩むということは避けたい。人の想いを無下にするなど、薄情な行いは一社会人（自称）として最も恥ずべきことだ。しかし、何から手を付けていけば良いのか暗中模索の状態である。

なので、気分転換がてらに他の店に行ってみる。何かヒントがあ

るはず。絶対に見つけなくては。

歩いて行ける距離にはお店が無かったので、D ホイールで巡る。一つ目のお店は中は綺麗で、カードのシングル買いが出来るお店であったが、如何せんシングルのお値段が高すぎる。それにお目当てのカードがうまく見つけれないという点がウィークポイントだった。あくまでも俺の主観であったが、それでもこの点は見逃すことはできなかった。

二つ目のお店もまたシングル買いができた。しかも安い。「D・D・クロウ」が300円、だと……？すぐに店員に言っただカードを何枚か出してもらい、衝動買いしてしまった。店員引いてた。いやあ結構な掘り出し物を見つけた、と意気揚々とお店を後にした。あ、お店の中を見るのをすっかり忘れてた……

三つ目は、通りに面した洒落た外装のお店。本当にカードショップなのかと疑問に思い、西洋のお城をかたどった入り口を抜ける。中は正しくカードショップだった。一瞬でも疑ってしまった俺が悪かったぜ。中を歩き回る。そして、デュエルしている人を見たり、売り場をチェックする。

結論から言うと、ここが一番だった。カードも探しやすく、前の

店程ではないが値段も良心的。初心者にしても経験者にしても欠かせないお店であると思う。何より他の人と気軽にデュエルしやすいデュエルしている人を見ている限りでは、大体の人が初対面であったような気がする。この雰囲気を作り出せるかが、家が成功するかどうかの分かれ道だな。

大体調べ物が終わったので、一休みしようとテーブルに着く。ここでもカードを買ったので、ケースに入れつつ雰囲気作りとカードの検索のしやすさが成功の鍵だなと一人思う。この事を報告すれば良いだろう。

「すみません。一戦してもらっても良いですか？」

などと考えていると、突然声を掛けられた。顔を上げると、恐らく小学生ぐらいの男の子がテーブルの向こう側に立っていた。あらかた周辺のお店は回ったので、一戦位なら大丈夫だろう。行き続けて調査しなきゃだし、別段断る理由もないからな。

すすむ はどうする？

たたかう もちもの
デッキ にげる

「いいよ、むしろ大歓迎。でもちよっと待ってね、今散らかったのを片付けるから」

「ありがとうございます！」

君の笑顔がすごく眩しい。あと俺、相手によって口調変えすぎだ……今更ながら自己嫌悪に陥りつつもカードを片付け終わり、デッ

キを取り出した。男の子もまたデッキを取り出した。

「お待たせ。じゃあ早速やりましょうか」

「分かりました。お願いします」

普通にデュエルするのも何なので、少し調子に乗ることにしよう。

……さあ！開戦の雄叫びが今、双方から発せられる！

「いざ尋常に「デュエル！」いや空気読もうよ……」

「あ、スイマセン……」

何とも締まりのない幕開けとなってしまうたが気にしない。気にすると悲しくなるから。

「んじゃ、先攻ね。俺のターン、ドロロー！俺は『ナチュラル・ビーンズ』を守備表示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

ナチュラル・ビーンズ

DEF：1200

ソリッドビジョン内蔵のテーブルからさや付きの枝豆が表れ、中から二つのデフォルメされた豆が飛び出す。見ていて微笑ましいんだが、まだ中に残ってる豆が余りにも不憫過ぎる。一つの豆の踏み台にされ、その豆がまたピョコピョコ跳ねるものだから涙目になっている。変だなあ、最近涙もろくでもなったのかなあ……油断するともらい泣きしそうだ。

変なこと考えてないで真剣にやろう。この世界ならではの表側守

備表示が、便利でしょうがない。守備が高いモンスターを安全に出せるし、様々なコンボに繋げやすい。俺のデッキもいろいろと恩恵を受けているので、ぜひ活用したい。

「僕のターンですね。ドロー。手札から『アトランティスの戦士』を捨て、フィールド魔法『伝説の都 アトランティス』を加えて発動します。効果でレベルが4に下がった『ジェノサイドキングサーモン』を召喚します。攻撃力がアトランティスの効果で200ポイントアップ！」

ジェノサイドキングサーモン

LV:5 4

ATK:2400 2600

幻とも言われる海の都から、レインが出るまで暗黒界最強と言われた鮭が、机の反対側においても感じられる位、強烈な水流を引き起こしながら飛び出してきた。しっかりとアトランティスを活用してきた。もう準備は万端なのだろうか。

「キングサーモンで『ナチュル・ビーンズ』を攻撃します」

だが、破壊はさせない。こっちだって準備はほぼ済んでるのだから。

「ビーンズは1ターンに一度だけ戦闘では破壊されない。そして、攻撃対象になったとき相手に500のダメージを与えるんだ」

さやの上に乗った豆がいつそう激しくジャンプし続ける。そして俺達が枝豆を食べる要領で中の豆が押し出され、男の子の元へ涙目のまま飛んで行った。あわれだ。

少年

LP：4000 3500

「駄目でしたか……カードを2枚伏せてターンを終了します」

「俺のターン。ドローしてビーンズをリリースし、『ナチュラル・バンブーシュート』をアドバンス召喚」

ナチュラル・バンブーシュート

LV：5

ATK：2000

「リバーズカードを発動『奈落の落とし穴』。バンブーシュートを除外します」

どんなデッキにも入る万能カードの登場だ。だが、それは通らない。

「バンブーの効果で相手は魔法・罠は発動できない。つーことで奈落で除去するのは無理だ。」

確かバンブーは、アドバンス召喚時に『神の宣告』などのカウンター罠以外では破壊されなかったはず。

「そんな……しかし、バンブーシュートの攻撃は2000ですので『ジェノサイドキングサーモン』の方が攻撃力は上です。次のターンで攻撃して、僕はまた罠カードを発動できますよ」

うん、それ負けフラグ。どんな状況であっても、それだけは言っちゃあいけない。

特に「次のターンで〜」とか「この攻撃が通れば〜」などの台詞を言った奴は、第一級敗北フラグ建築士に指定されてしまうので、デュエルする皆は注意して欲しい。言った時に限って大抵負けるから。

「さらに、永続魔法『強者の苦痛』を発動するね。相手モンスターへの攻撃はレベル×100ポイントダウン。よって、サーモンの攻撃を400下げる」

ジエノサイドキングサーモン

ATK：2600 2200

「更に『二重召喚』発動。『ナチュラル・フライトフライ』を守備表示で召喚。コイツの効果で、攻撃力と守備力が更に600ポイント下がる」

「なっ、更に攻撃力が下げられていく……」

サーモン

ATK：2200 1600

DEF：1000 400

「そしてバンブーでサーモンに攻撃！『バンブー・ストライク』」

タケノコの子が鮭を襲う。植物が魚を屠るという、非常にシュールな光景と相成った訳だけど、男の子はさほど驚いていない。まあ、普段から見慣れているだろうから、日常茶飯事なのかもしれない。

何かやだな……いきなりこんなもんを見せられたなら、俺だって吹き出してしまう。

少年

LP：3500 3100

「カードを伏せて、ターンエンド」

「僕のターンです。ドロー。『コダロス』を召喚します」

コダロス

LV：4 3

ATK：1400 1600 700

「『コダロス』の効果発動！『海』をフィールド上から墓地に送り、カードを2枚破壊します。僕はアトランティスを墓地に送り、バンブーシユートとリバーズを一枚破壊します。『ウォーター・デストラクシヨン・ミニマム』！」

コダロス

ATK：700 1000

津波によって、カードが押し流されてしまった。流石はダイダロスの幼体、破壊力はピカイチである。バンブー破壊されたのは痛い、俺にとっては好都合なことにそっちのリバーズはハズレだ。

「破壊されるのにチェインして畏カード『威嚇する咆哮』を発動。相手はバトルフェイズを行えない」

「っ、ターンエンド」

さあ、オレのターンだ。さてどうしよう？下手なプレイングをすると、こっちが泣きを見る羽目になる。この手札で最良の手を打たなければ。

「俺は、ビーンズを再度召喚する。フライトフライを攻撃表示に変更してバトルフェイズに入るね。フライトフライで『コダロス』に攻撃」

「リバーオープン。『炸裂装甲』フライトフライを破壊します」

「やべっ!?!」

突撃した虫は『コダロス』へと狙いを変わらず進んでいく。が突然、秘孔を突かれたかのようにプルプルと震える。その後に「ひでぶつ」と声を発するかのような断末魔を上げ内部から爆殺され、フライトフライを形作る果実の汁だけがフィールド上に飛び散っていった。ミックスジュースとなった相棒を呆然と見つめる。

グロツ！結構グロイ！最初はそう思った。時間が経つにつれて、代わりに何かが入り込んでくる。食道までせり上がるそれは、言いようもない刺激を俺に与えてくる。

自分の顔と同じくらいのサイズの虫が中身飛び散らして果てる様は、元の見た目がどうであれ好き好んで見るようなものでは決して無かった。当たり前といえば当たり前だけでも。

無意識の内に逆流する酸っぱいアレを、息を飲んで無理矢理抑えこんだ。無惨にも破壊されたフライトフライを見つめる。そして、思考を現実逃避させる。……バンブー破壊されたのはまずかったな。

次の手を考えなくては。

「くっ、俺はカードを一枚伏せてえターンエンドだ」

意外と動揺を隠せた。だが、一々発言する度に込み上げてくる強酸性でタンパク質分解消化酵素 ペプシンが含まれるさつき食べた朝飯と入り混じった液体が、俺の喉のすぐそこまで来て刺激する。ヤバい、トイレ行きたい。

「僕のターン。もう一度アトランティスを発動します。効果で『カタパルト・タートル』を守備で召喚！」

カタパルト・タートル

LV:5 4

DEF:2000 2200

初代主人公、王様こと武藤遊戯が一時期使っていた機械族っぽい水族の亀の砲台が、伝説の都の建物の影からゆっくりと姿を現す。今度はバーンですか、そうですね。

「『コダロス』を射出します。攻撃の半分、650ポイントのダメージを受けてもらいます」

「っ！」

進

LP4000 3350

『コダロス』の効果よりも、ダメージを優先させてきたか。アトランティスは次のターンのために温存しておくのか発動したままだ。さては、次のターンからキ○ガイのように射出する気だな？中々強かな戦術を展開してくる男の子である。

脳裏にいにしえの記憶が鮮やかに蘇るが慌てて頭を振ってソイツを追い出す。今ここで真っ白に燃え尽きる訳にもいかないので、本格的にライフが蜂の巣にされる前に叩かなければ。

「カードを伏せてターンエンドです」

「よし、俺のターン。『ナチュル・マンティス』を召喚。……一枚伏せターンエンド」マンティス

LV:4

ATK:1700

普段は優秀なアタッカーなマンティスだけど、タートルの防御に阻まれてどうすることもできない。

攻撃もできず、受け身になっているように見えるが、最善の手段はこれを召喚するしかない。とりあえず弾となる上級モンスターを……潰す！

「僕のターンです。レベル5の『ギガ・ガガギゴ』をリリース無しで召喚します」

よし、そこだ！

「マンティスの効果、発動！モンスターが召喚に成功した時、手札

のナチュルを一枚捨てることでそのモンスターを破壊する。手札から『ナチュル・バタフライ』を捨てて、『ギガ・ガガゴ』を破壊」
「えっ、そんな……」

代表的な上級を召喚し得意げな顔からさっと困惑の表情にすげ替わった男の子は、悔しがりながらもターンを終了する。

さて、俺のターンだ。ドローする前に少し考える。元凶となっているタートルをどうにかせねば勝ちを掴むことは遠い。手札も無限でない。何でも良いから引かなくては。

「いくか、ドロー！」

デッキの一番上を御開帳。すぐに加えて次の行動に移る。

「リバースカード、オープンだ。『地霊術 「鉄」』発動！マントイスをリリースし、墓地からレベル4以下の地属性モンスターを特殊召喚する。呼ぶのはもちろん！『ナチュル・フライトフライ』だ」

先程爆殺された植物っぽい昆虫が見事に復活する。五体満足というか傷一つない様子にひとまず息をつく。

フライトフライ

LV:3

ATK:800

「更に手札から『地獄の暴走召喚』を使う。フライトフライを2体特殊召喚」

「『カタパルト・タートル』は一枚しか入ってません。僕は効果を使えない……」

そんな男の子を尻目に無情にもデュエルは進んでいく。

「フライトフライの効果。場のナチュルの数×300ポイント攻守が下がる。よって1200×3＝3600ポイントダウンだ」

タートル

DEF：2000 0

一瞬で強固な壁が脆くなる。我ながら恐ろしい程に効くな……バンプー出した辺りで自重した方がよかったかなと感じるも、俺自身の効果 後悔を発動するタイミングを逃してしまった。今更変えるのは不可能だ。

しょうがないのでフライトフライの効果でタートルのコントロールを奪うのは自重する。そんなことをすれば、また相手をしてもらえなくなってしまう。

「更に墓地にあるバタフライとマンティスを除外する。そうすることで『デビルドージャー』を特殊召喚！」

デビルドージャー

LV：8

ATK：2800

頭をもたげたのは相手からすれば憎たらしい顔した巨大な百足。何ともない様子をしている男の子だが、忌ま忌ましく思ってることだろう。ゴメン、勝手に大人気ないこととして……

「フライトフライでタートルを攻撃！」

先陣を切って迫り来るフルーツ昆虫。今度は何も邪魔されずに目的を達成した。防御が紙になったタートルを喜々として葬る。

「続いて残りのフライトフライと『デビルドージャー』でダイレクトアタック！」

虫達の突撃。先程爆殺一（そして復活）された仲間の無念を晴らすかのように、反撃を開始したのだ。

有り余る力は簡単にライフを削り去る。つまるところオーバーキル。結局自重しきれなかった俺であった。

男の子

LP：35000

うむ、最後の方は比較的スムーズに勝つことができた。……自重はしなかったが。

ありがたいことに、吐き気もすっかり鳴りをひそめておられる。胃薬を服用した後のような胃は実にスッキリとした気分だ。

しかし、懸念は立ち消えない。自重できないのと、これからもソリッドビジョンで色々とヤバイシーンが続出しそうなのだ。早急に耐性をつけておかなくては……

男の子も悔しいようで、かつやり遂げた感が感じられる顔をしている。申し訳ない様子でしばらく見てると、また声を掛けてきた。良かった、嫌われて無かった。

「すみません。よかつたらデッキを見てもらって、何かアドバイスしてもらっても良いですか？」

相変わらず小学生らしからぬ丁寧な話し方をする彼である。まあ、話し方なんて人それぞれだし気にしなくてもいいか。

「OK。参考になるか分からんけど、真剣に見ましよう」

そう言つて男の子からデッキを受け取り、机の上に広げる。見てみると結構完成させられたデッキだった。傍目から見ても事故率はそんなに高くなさそう。だが、『カタパルト・タートル』の存在だけが不協和音を奏でているようではなかった。

「デッキコンセプトはアトランティスでレベル5モンスターを召喚しながら、タートルでバーンしてくのでいいの？」

一応聞いてみる。自分が意図したのと傍からみたモノは違う時がある。

「いえ、上級で殴るだけです。『カタパルト・タートル』はお守りみたいなモノですよ。あの決闘王が使っていたカードですし」

「左様か。じゃあ、使わないことはますます勿体ないなあ。大量展開してから一気に射出するとか使い様はたくさんあると思うよ。やりようによっちゃあ、巷で話題のシンクロ召喚も組み込めるし」

『カタパルト・タートル』は今亡きDDBの代わりにバーン要員として俺はそこそこ評価したりする。モンスターさえ切れなければ、継続的にダメージを与えられるのは無視できない。生け贄が一体いるのと、DDBが優秀過ぎたことが痛い。

「水属性で、大量展開できるのって何がありましたっけ？」

「うーん。カエルとか魚族かな。他にもやりようによって何とかなと思う」

他にもカードショップで強い人がいるとか、この店は大体のカードが揃ってて便利だとか、様々なことを話してくれた後に男の子と分かれた。

D・ホイールで爆走し、そのままセブンに出勤。今日の成果を店長に報告する。カードプールの豊富さと検索性の高さ、そして誰でも気兼ねなく入れる雰囲気が必要だということを伝えた。

店長は聞いた後にしばらく思索すると「改装の必要があるかもしれんな」と呟き、俺の労をねぎらってくれた。これからも継続してやって欲しい、と頼まれたので暇を見つけてちよくちよく通おうか

と思う。

報告も無事に終わり、商品の補充をする。そういえば件のコーヒ―はどうなったかしら、と思い立った。補充する必要があるかもしれないので、店内の棚を確認する。

驚くべきことに3種類とも非常に良く売っていた。特に超VIP商品『ブルーアイズ・マウンテン―（缶）』が異様に売れており、あと3つしかない。どういうことだ？30個は入れたいはずだ。果たして誰が買っているのだろうか。というか、簡単に手が出せるモノなのだろうか。

しばらくぶつぶつと疑問を漏らすが一向に理由が分からない。超高価商品の謎の人気に戦慄しながらも仕事を進めるのだった。どんとはらい。

第4話・自重をすることは、時にコミュニケーションの潤滑油となる（後書き）

ふう……一話作るのにとってもなく時間がかかってしまいました。

中々納得の出来る話を書けないのが現状です。

まだまだ初心者の域を抜け出してませんが、拙作をどうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0968m/>

遊戯王5D's ~ 今はこの道を駆けよ

2011年2月15日09時48分発行